

明治大学大学院 文学研究科

2018 年度

博士学位請求論文

(要約)

「大正デモクラシー」期における知識人の社会的視野

－大衆社会化論の批判的再検討－

Social Perspectives of the Intellectuals during the Time  
of “Taishō Democracy”:

A Critical re-examination of the Mass-socialization  
Theory

学位請求者 史学専攻

雨宮 史樹

## 1. 目次

### 序章

- 第1節 問題の所在
- 第2節 研究史の整理
- 第3節 問題の限定
- 第4節 本論文の構成

### 第1章 青年知識人と「社会」の発見

#### はじめに

- 第1節 宮崎龍介の人格形成過程
- 第2節 東京帝国大学入学と学生団体新人会結成
- 第3節 新人会時代の労働組合運動
- 第4節 中央法律相談所における弁護士活動

#### おわりに

### 第2章 青年知識人と白蓮事件

#### はじめに

- 第1節 白蓮事件がおきるまで
- 第2節 新人会出身者による援護
- 第3節 青年知識階層の形成とその思考

#### おわりに

### 第3章 社会的上層と白蓮事件

#### はじめに

- 第1節 白蓮事件の意図せぬ効果
- 第2節 宮内省および政治家における白蓮事件
- 第3節 国外における白蓮事件
- 第4節 一回性としての白蓮事件

#### おわりに

### 第4章 大衆社会という幻影－新人会出身者の東アジア観を中心として－

#### はじめに

- 第1節 新人会員の視野
- 第2節 宮崎龍介と東アジア

### 第3節 宮崎龍介と日本社会

おわりに

## 第5章 満州事変と「大衆」の発見

はじめに

### 第1節 満州事変の勃発前後

### 第2節 上からの社会統制願望—日中戦争以降—

### 第3節 新人会出身者が視界にとらえられなかったもの

おわりに

## 終章

### 第1節 本論文の結論

### 第2節 残された課題

## 2. 問題の所在

### 序章

本論文は、「大正デモクラシー」期に知識人が社会をどう認識し、その営為は、いかなるものであったのかということを描き出す。さらに、それら知識人の姿を素材として、当時の日本の社会構造が、どのような特質を有していたかを逆照射させる。具体的対象として、「前期」新人会出身者と宮崎龍介の言行に焦点をあてて、分析をおこなった。

この課題に接近するために、本稿を貫通する1つの分析軸を設定した。それが、大衆社会化論の批判的再検討という視座である。大衆社会化論は、日本近現代史に普遍理論を適用して、歴史を叙述していく。歴史学研究は常に、現在的問題に対する緊張関係を持ち、諸問題の理解や解決に役立つ取り組みが求められている。つまり、大衆社会化論の批判的再検討という視座を設けたのは、筆者が、普遍理論の適用によって日本社会を理解することは、はたして可能なのだろうか、という強い疑問を持っているためである。

最近の日本社会をみると、政治家たちは国家の強さと、経済の大きさをことさらに強調している。また、メディアに目を向けると、テレビなどでは、日本や日本人の「素晴らしさ」を強調する番組がもてはやされ、連日のように放送されている。ネットの世界の論調は言わずもがなだろう。「日本の優越性」、言い換えれば普遍願望は、近年の隠れた流行語ではないだろうか。経済大国の地位から転落し、格差社会の中で暮らす現在の日本で、そのようなキーワードは、社会のそこかしこに溢れかえっている。

現在の歴史学研究は、このような社会情勢に、自覚的に向きあっているだろうか。近年の日本近現代史研究は、ことさらに日本の社会が持つ可能性を描き出すことに急ではないか。可能性、言い換えれば希望を語る歴史学にどれほどの効果があるのだろうか。確かに日本近代をみても、田中正造や宮崎滔天とか吉野作造など、特筆すべき思想的営為をおくった人物が存在したことも、また事実である。しかし、歴史全体でみるとそれらの人物は、数量的にも極めて少数であり、その思想的伝統もあまりに点的である。日本の社会運動は、どこまで負けないか、もしくは、どう負けるか、ということを目指すべきだと揶揄される所以である。日本社会が持つ可能性や希望をすくい上げる方法論は、その裏側で、そのような希望は継続しえないという、絶望の肖像を描き出していることを自覚しなければならない。普遍理論に依拠する歴史像の批判的再検討が必要であろう。

政治思想史研究者の丸山眞男は、その思想的営為の終着地点―「古層論」の分析枠組みを参照せよ―で、日本の思想が普遍的であるとすれば、当然有しているはずであろう正統の条件を充たしていないという問題にたどり着いた。日本の近代という、現在も解かれていない古くて新しい問題に、正面から向き合い続けた丸山が、最終的に提出した回答―であるととも難解な問い―は、皮相なポスト・モダン理論をよせつけぬほど再考の意義を持っていると考える。

本稿では、日本に独特な個性という要素を重視することによって、「大正デモクラシー」期の社会を描きだしていった。

「大正デモクラシー」期を扱う本稿において、はじめに整理しておかねばならないのは、大正デモクラシー研究だろう。論者によって程度の差があるものの、同研究では、1910年代から20年代の日本において、被支配諸階層に属する人々が、自立的に社会運動へ参加する動態が対象とされてきた。そこでは、当時における諸運動の興隆を把握できる一方、ある前提が設定されているように思われる。それは、「大正デモクラシー」という標語に明らかなように、同時代の民主主義的思潮が、社会を包摂していたという認識である。しかし、当時の日本は、本当に、社会全体の改造を志向するような思潮に包まれていたのだろうか。

次に、大衆社会化論について見ていきたい。同論は、日本近現代史の発展過程を、近代から現代への転形において捉えるべきだと主張する。大衆社会化論は、その転形開始期を20年代から30年代においていく。この議論は、30年代以降を視野に入れる意思において、大正デモクラシー研究がもった限界を止揚しているようにも見える。しかし、大衆社会化

論もまた、国家と地域の再組織化が進行して、社会的格差が平準化していくという普遍理論に根拠していた。特に、近年の大衆社会化論は、日本に特異な個性に注目するよりも、普遍理論に適合的な要素を重視していく傾向にある。言い換えれば、現在の大衆社会化論は、普遍的現代社会や公共社会の萌芽が、1920年代の日本にあったという希望を語っているのである。しかし、であるのならば、なぜ同時期、新人会出身者などの知識人がおこなった社会改造運動はことごとく敗北していったのだろうか。社会再編の達成例よりも、敗北の過程にこそ、当該期における社会構造の実態が反映されているのではないだろうか。

これらの疑問を紐解く糸口は、いくつかの先行研究において指摘されている。大正デモクラシーが、凋落していったことの意味を問うた鹿野政直は、同時代の民主主義的潮流に参加できなかった膨大な民衆の姿をすくい上げた。また、メディア史研究では、有山輝雄が20年代の社会を大衆化や格差の平準化として議論することに強い警句を与えている。これらの研究は、同時代を大衆社会化以外の時代像で捉えるための示唆をあたえてくれる。

近年の新人会研究も、大衆社会化過程において同会出身者の活動を分析している。本稿では、「大正デモクラシー」期を必ずしも大衆社会状況とは捉えない。そこにおいて問われねばならないのは、新人会出身者ははたして、戦前において一度でも大衆なるものを実体として認識しえたのであろうかということである。

### 3. 各章の要約

#### 第1章 青年知識人と「社会」の発見

第1章では、1918年末に東京帝国大学で結成された、学生団体新人会の創立者の一人宮崎龍介の人格形成期から新人会時代及び大学卒業後の活動をおった。この龍介の行動をもとに、同時期、社会に複数輩出されるようになった青年知識人の具体的姿に迫っていく。

龍介は、大陸浪人宮崎滔天の息子として生まれ、少年時代から孫文をはじめとする進歩的思想を持った中国の知識人らと交流を持ち、人格形成をしていった。東京帝大の法科に進んだ龍介は、赤松克麿、石渡春雄とともに新人会を結成する。同会で龍介らは、独自の労働組合全国セルロイド職工組合を組織し、実践運動に参加していくことになる。同組合からは、渡辺政之輔や岩内善作といった、その後の労働運動で頭角をあらわしていく人物が輩出された。

また、龍介は、大学卒業後も中央法律相談所に所属し、川崎・三菱両造船所争議や横浜船渠争議など諸種の労働争議において、検束された労働者に法的支援をおこなった。彼は、

中央法律相談所が発行していた雑誌『中央法律新報』にも複数の論考を掲載している。そこで、龍介は、「社会」の発見という時代状況を援用する形で、労働者のための法律を作るように訴えたのだった。

本章では、宮崎龍介の活動をもとにして、「社会」の発見の時代に躍り出た、青年知識人のエネルギーに溢れる姿を描き出した。1910年代末から20年代はじめにかけて青年知識人は、ほとんど休息をとることも忘れて、社会改造のために全国各地を奔走した。しかし、ここで考察の筆をおいてはならない。なぜなら、1920年代はじめまでこれほどエネルギーに活動し、権力に対峙した龍介も、30年代になると国家がおこなった戦争に賛成していくのである。なぜ、龍介ら青年知識人は、このような事態に陥ったのだろうか。そのことを、次章以降で描き出していく。

## 第2章 青年知識人と白蓮事件

第2章では、職業的新聞人でない新人会出身者が主導したマス・メディアキャンペーンである白蓮事件を事例として、1920年代はじめにおける青年知識人の存在形態と、彼らの自己認識に迫っていった。

白蓮事件は、東京帝大を卒業し、社会派弁護士として活動していた宮崎龍介と、既婚の女流作家伊藤燐子（ペンネーム柳原白蓮）が、恋愛関係に陥った後、燐子が出奔したことによって起こった。白蓮事件は、マス・メディアのセンセーションを引き起こしていく。この事態の経緯は、宮崎龍介から燐子との交際について相談された、新人会出身者の赤松克麿と早坂二郎が、女性解放を旨としたマス・メディアキャンペーンを展開することによって、龍介と燐子のおかれている状況を打破できると構想したことにある。新人会出身者は『大阪朝日新聞』を利用して、伊藤燐子名義の夫にあてた絶縁状を公開し、白蓮事件を展開していく。この報道を前にして、大阪・東京両朝日新聞社とともに、当時日本の二大新聞であり、『朝日』と発行部数争いで対立関係にあった『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』の同系統新聞社も連日大々的に、そしてスキャンダラスに白蓮事件を報道していく。また、二大新聞の報道合戦に引きずられる形で、他の全国紙や地方紙、もしくは雑誌など、多くのマス・メディアが白蓮事件を伝えていった。

白蓮事件は、新人会出身者においてエポックとなった。新人会は活動を開始した時点から、同時代を大衆社会状況だと考え、マス・メディアを用いた宣伝という方法論に注目していた。1920年代に入ると、青年知識人は複数のものが大学を卒業し、労働組合、法曹界、

マス・メディアや学術研究分野など、社会の多様な職業についていった。この段階に至り、彼らは自らの宣伝を新聞においておこなう可能性を手にした。それは、彼らにおいて、新人会結成当初における宣伝への注目という方法論の構想段階から、実際にマス・メディアを操作していく実践段階へと、改造運動における跳躍をもたらした。白蓮事件は、弁護士、労働組合組織者、新聞記者によって計画、展開された。この事件は、青年知識階層の社会的成立を体現していたのである。新人会出身者は、白蓮事件を自身の展開した社会改造運動における数少ない成功事例だと認識するようになった。彼らは、その後も各種の運動において、マス・メディアを用いた宣伝という手法を重視していくことになる。

しかし、この宣伝への没入は、青年知識人における陥穽でもあった。情報操作をも含むマス・メディア利用は、宣伝に依存することによって、強い啓蒙性を帯びることとなる。宣伝への依存度の増加は、啓蒙的性格の全面化につながり、それは往々にして上からの統制という志向に行き着くことになる。つまり、白蓮事件は、その後、巨大な社会的統制装置を夢見て、新人会出身者が賛同した、近衛新党運動や近衛新体制構想に連なる思考様式の勃興地点でもあったのだった。

### 第3章 社会的上層と白蓮事件

第3章では、新聞社の報道記事を主たる分析対象として、白蓮事件がなぜ、一回性の出来事で終わってしまったのかということについて考察した。

新人会出身者は、女性解放というシングルイシューを設定して白蓮事件を展開した。しかし、事件は各新聞社の報道を経る中でベクトルが変更され、批判の矛先は華族と、それを監督する宮内省へ向けられた。他方、宮中某重大事件などの後遺症覚めやらぬ宮内省は、白蓮事件に極端な恐怖心を抱いた。宮内官僚たちは、白蓮事件の新聞報道をヒステリックに解釈し、彼らはそれを華族批判ではなく、天皇および天皇制という国家の支配構造自体が融解していく過程だと感じとっていた。

白蓮事件は、計画者の意図とまったくことなる次元で、解釈されてしまった。つまり、1920年代初頭の日本では、大衆煽動的宣伝が確たる効果を示さないのだった。

### 第4章 大衆社会という幻影－新人会出身者の東アジア観を中心として－

第4章では、「前期」新人会と宮崎龍介の朝鮮や中国に対する視線をもとにして、「大正デモクラシー」期における知識人の社会認識の振れ幅を描きだした。この課題に接近する

ために、大衆社会化論の批判的再検討という既述の分析軸とともに、新たに日本人の東アジア観という分析軸を導入していった。

第一次世界大戦後、それまで帝国主義政策を採り東アジアに侵出していった日本は、その闘争の場とされた国々からの強い批判に直面した。新人会出身者は、国内の改造運動をおこなうとともに、日本の帝国主義政策の抑圧下にある人々に対しても共感を示していく。それにもかかわらず、1930年代以降、同会出身者の多くが日本の対外戦争を支持していくことになる。改造運動を開始した当初、朝鮮や中国の批判に積極的に反応した彼らの営為は、なぜ最終的に対外戦争肯定へと帰着していったのだろうか。筆者は、これら新人会出身者がたどった軌跡を解き明かす鍵は、20年代にあると考え、本章を分析していった。

新人会出身者は、自身の運動を達成するためには、広範な人々から支持を得ることが必要であることを理解していた。同時代を大衆社会状況だと考える彼らは、機関紙を発行するなど宣伝活動を重視する。しかし、彼らが期待をかけた宣伝は、社会に対して影響を与えていないことが判明してきた。新人会出身者は、1920年代を通じて恒常的な支持基盤の喪失状態におかれる。

ただ、同時代、彼らは広域な事象にも眼をひらいていった。新人会の三・一運動や五・四運動支持は当時において最も急進的な内容を持ち、一つの時代的到達点であった。特に、1920年代前半に、コスモ倶楽部や雑誌『亜細亜公論』など、東アジア出身の知識人が活動する組織を支援した宮崎龍介の営為は、同時代に新人会がおこなった主張を体現するかのごとくであった。

しかし、彼らの東アジア観にはその端緒から、対話と優越というアジア主義的アポリアが胚胎されていた。20年代後半、普選運動を展開していく中で、新人会出身者の社会的位置は変化していく。それを、宮崎龍介に焦点を絞ってみてみると、普通選挙法公布後、彼は社会民主主義的政策をとる社会民衆党の結党に参加した。しかし、龍介をはじめとする社会民衆党に参集した知識人たちは、ここでも労働者からの支持を獲得できずにいたのだった。普選実施という絶好のチャンスにもかかわらず、有効な支持基盤が構築できない。当然、彼らを拘束していた焦燥感は頂点に達する。その時、新人会出身者が胚胎していたアジア主義のアポリアが発露した。彼らは、国内における支持基盤を構築するために、日本のアジアにおける優越性を強調し、他方でそれ以前までかろうじて保持していた同地域への共感を切り捨てたのだった。



## 第5章 満州事変と「大衆」の発見

第5章では、宮崎龍介の言行をおいながら、新人会出身の知識人が、満州事変からアジア・太平洋戦争までの期間に、いかなる社会認識をもち、またいかに行動していったのかを描き出していった。この問題に接近するために前章で採用した、①大衆社会化論の批判的再検討と、②日本人の東アジア認識（≡アジア主義）という2つの分析軸を引き続き用いた。

宮崎龍介は、満州事変後、排外主義を伴いながら事変に熱狂する人々を見て、「大衆」を発見した。吉本隆明の転向論は、満州事変後におけるマルキシストの転向過程を、理論上、大衆の前衛たるべき彼らが、大衆との連帯意識を喪失した際にさらされた、孤立感にあったとしている。満州事変後に「大衆」を発見した龍介と、「大衆」からの孤立によって、屈服していくマルキシストとは現実世界を認識する上で、正反対の軌跡をたどったことになる。

宮崎龍介は、この「大衆」からの支持を得るために、中国に対して強情な発言を繰り返す。龍介をはじめとする新人会出身者は、日本を東アジアのみならずアジア全域一の指導国に位置づけた。その上で彼らは、日本がイギリスとアメリカとの間で国家間闘争を行なうことは不可避という宣伝を用いて、発見した「大衆」からの支持獲得を目指した。つまり、新人会出身者は、日本が抱える矛盾や不平のはけ口を、外国の脅威に転化したのだった。1920年代から40年代にかけて、龍介らがおこなった行為は、社会主義の階級闘争理論を国家間闘争の論理にすり替えるものだった。龍介は、近衛新党運動や近衛新体制運動を支持し、戦争という非日常を用いて国内社会の再編成を目論んでいく。

しかし、戦前の日本において諸階層間の懸隔が平準化したような大衆社会は、ついに成立することはなかった。同時期の社会には、常に複数の階層間にはしる亀裂が存在していた。総力戦体制をもってしても包摂できない民衆世界が分厚く存在したのである。龍介らが賛同した、近衛新党運動や新体制運動の無残な崩壊及びアジア・太平洋戦争の敗戦は、彼らが「大衆」を発見したと思いつつも、一度たりともその存在を手にとることができなかったことを物語っている。

## 終章

本稿で明らかになったのは、同時代を大衆社会状況だと考える知識人が、どんなに真剣にそして積極的に行動しても社会的に孤立していく姿である。「大正デモクラシー」期に活動を開始した新人会出身者がもった最大の問題は、彼らが同時代を大衆社会だと観念した

ことにある。松沢弘陽がつとに指摘しているように、新人会は、欧米由来の改造思想を、ただ新しいだけで賛美し、日本の社会分析に適用していった。彼らは、日本とヨーロッパにおける質的差異をどこまで真剣に捉えようとしたのであったか。しかし、彼らの主観とは裏腹に、同時代は大衆社会状況を形成していなかった。恒常的焦燥感につきまとわれながら、新人会出身者が歩んだ道のりは、最終的に上からの社会統制と戦争協力にいきつくことになった。それは、国内外に膨大な被害を生み出した。

大衆社会化状況とは、たとえ端緒的にせよ、多数の人々が一定程度平準的にマス・メディア／マス・コミュニケーションの情報を入手し得、あわせてそこで作り上げられる文化や言論を受容するような社会現象の進展過程だといえよう。でなければ、社会的中層や下層に属する人々が中心となった社会再編は期すべくもない。つまり、大衆社会化とは情報や消費における格差の平準化が実現していく中で、いわば均質で匿名的な価値観を持った人々の集団が形成されていく状況を指す。

新人会出身者もこの理論は理解していた。であるからこそ、彼らはそのような均質な価値観を持った集団と接触するために、マス・メディアにおける宣伝を重視したのだった。しかし、この宣伝という方法論に固執した新人会の改造運動は、ことごとく空振りに終わった。新人会出身者が、大衆を実体として捉え得たことは、戦前において一度もなかったのである。本稿を分析してきた筆者は、新人会出身者の苦悩と葛藤に満ちた活動をあとづけた。しかし、その反面で、同時代における彼らの言説のどこを見ても、濃密な接触にもとづいて形成される共同体についての眼差しが欠如していることを発見するとき、日本の知識人がもつ悲劇性を感じずにはいられない。それは、1920年代の日本における知識階層と、その他の諸階層との間に走る亀裂がどれほど広く深いものであったのかを物語っている。

戦前の日本においては、均質で匿名的な大衆の現前という事態はついに起こりえなかった。「大正デモクラシー」期の日本とは、具体的な名前や個性を持つ人々が、濃密な直の接触をもとに形成していく日常生活、言い換えれば諸社会階層間の中で鋭く分断された共同体における営みが優位する状況が、厳然と機能し続けた時代であったといえよう。

大衆社会化論が評価するのは、普遍理論に適合的な事象である。「大正デモクラシー」期を、大衆社会化過程だと見る研究者もあるいは、新人会出身者と同じ眼差しで世界を眺めてしまっていないだろうか。